

Game Changer プロジェクト 往訪プログラム オランダ視察概要

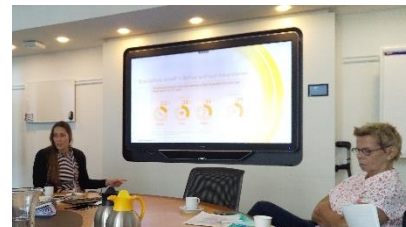
令和元年9月15日（日）から22日（日）まで

視察概要

1 オランダ政府（オランダ健康・福祉・スポーツ省）の取組

【「スポーツ合意」（2018年）の目標】

- 1 共生スポーツ
 - ・地域スポーツコーチは、5,000人が活動
 - 政府が2万ユーロ、自治体が3万ユーロの報酬を負担
- 2 持続・継続性のスポーツ（施設だけでなく資金的要素も含む太陽光発電も行う）
 - ・政府は2億4万ユーロ負担している
- 3 スポーツの提供者
 - ・クラブのボランティアなど。民間施設の活動を強化することもクラブのため
- 4 ポジティブなスポーツ文化・安全性
- 5 若い時からスポーツに参加し、ふれあう
- 6 エリートスポーツ（オリンピック・パラリンピックの要素）
 - ・国民約1,700万人のうち、約940万人がスポーツをしている。このことが、エリートスポーツの基本になっており、小さな国でもエリートスポーツが強いことを誇りにしている。



2 ハーグ市の取組

※ハーグ市は、オランダ第3の都市。政治の中心地。人口50万人（180国籍、20%が障害者）。

（1）ハーグ市のスポーツ方針

「2030年までにスポーツ参加率100%を目指す」

- 期待する効果
- ①市民の健康とより楽しく情熱的な生活
 - ②人と人を連携させ、街の住みやすさの向上



（2）目標達成に向けた具体的な取組

- ・ スポーツインフラ（スポーツクラブとの連携、誰でも使える施設設計）の整備
- ・ 障害者の国際大会（インビクタス・ゲーム（傷病兵のための国際スポーツイベント）2020年大会開催、スペシャルオリンピックス（知的障害者のスポーツイベント））の開催
 - 開催目的 ①国際大会を観戦することで、誰でもスポーツできることを見える化する
 - ②障害者本人がスポーツを楽しめる経験を提供する
- ・ 教育施設及びスポーツ施設を誰でも使えるように開放する。
- ・ ハーグ市がスポーツコンサルタントを採用し、スポーツクラブを支援する。ほとんどのスポーツクラブが社会貢献したい気持ちが強く、障害者の受け入れに積極的である。
 - ※市内の240クラブのうち101クラブで障害者の受入可能としている。

- ・バリアフリー改造などの資金として、国やハーグ市が支援金を出す。

3 スポーツ相談窓口

(1) スポーツ相談窓口＝Sports Service Point (SSP) とは

- ・障害者ができるスポーツを見つけ、どこでスポーツができるかアドバイスをする場所

【利用手順】

- 予約 → 会って話し合う → スポーツクラブを紹介(支援が必要であれば一緒に行く)
- ・近隣自治体とも協力し、ハーグ市外のスポーツクラブも案内する。

★SSP担当者の話より★

①運営のポイント

- ・利用対象者が SSP を紹介できる人に見つけてもらえること
(遠慮せず話し合える環境があり、背中を押してくれる人がいると、相談窓口につながられやすい)
- ・利用対象者をスポーツ運営組織につなげること
(スポーツクラブで対象者を支援してくれる人や一緒にスポーツをしてくれる人がいると、障害者のスポーツ活動が継続しやすい)

※オランダには、障害者手帳がないので、行政から障害者への直接のアプローチが難しく、障害者の周囲にいる人が、スポーツができる場所へつなげる必要がある。

②SSPが機能するために

- ・利用してもらえるように人に知らせること
例：地域のホームドクターから患者へ案内、障害者がいる施設に行って宣伝する
- ・紹介できるネットワークを築く
(SSPのスタッフ個人の努力で紹介できるスポーツクラブ把握する)
- ・対象者が尋ねやすい場所に設置する
(移動式として対象者がいる場所に出向く方法もある)

(2) リハビリテーションセンター内の相談窓口

- ・主な利用者：リハビリテーションセンター退院前の患者
- ・対応者：運動の専門家8人

【相談の主な内容】

退院後にもスポーツをしたい人が多く、健康的なライフスタイル、運動を続けられるような相談に応じる。

【相談の手法：モチベーションインタビュー】

- ・患者がどのようなものに情熱を持つかを探る聞き取り方
- ・患者のスポーツに対する関心・意欲の度合い (①何をしたいかわからない ②何かした



いけど、どうしたら良いかわからない ③決心したけど、やっていない ④スポーツをしている ⑤維持している ⑥やめてしまった)を把握し、SSPから障害者へのアプローチを考える。

↓

【聞き取り後】スポーツクラブを紹介(紙ベース)し、患者自身がスポーツクラブに連絡してスポーツクラブに参加

↓

【アフターケア】4週間後にSSPから利用者へ電話連絡と、9か月後に再度電話連絡する。スポーツクラブでの活動は70-75%くらいの人が継続している。一人約250人利用者を担当している。

(3) スポーツキャンパスの相談窓口

- ・多くの人が来ている場所で、将来スポーツの仕事をする人も学ぶ場所であり、相談窓口として適している。
- ・職業専門学校生も窓口に入り、一緒にスポーツクラブに行ってスポーツし、一人で行けるような支援(スポーツフレンズ)をする。
- ・ケアでのクリニックを通してSSPの認知度を高めている。



★SSP関係者の話より★

【利用者(義足の男性)】

フィットネスジムを希望してSSPに紹介してもらったが、「幸せになれない」とSSPに戻ってきた。

幼い時に武道をしていたので、身体障害者、視覚障害者など誰でも歓迎している武道のスポーツクラブに変えたところ、目標達成で自信が付き、自己啓発ができるようになった。また、「他の障害者にも自分の経験を伝えたい」と話した。

SSPスタッフやスポーツクラブコーチが、障害者が「スポーツをしている」と感じられるまで一緒に考えるネットワークや、障害者を変な目で見ないでクラブの一員として受け入れられる場所が一つでもあることが必要である。



【スポーツクラブの先生と支援者】

障害のある人もない人もみんなが一つのグループになるべきであるとともに、スポーツクラブの先生も手法を開発し続ける必要がある。「誰もがスポーツに参加できる環境」を共に探し続けていることが分かった。

【SSPスタッフ】

「第六感的に結びつけている」と話した。お互いが話し合って段階を踏んでいく「人間が中心の活動」がSSPであり、スポーツのネットワークにつなげ、人と人をマッチ

ングする中でも、スポーツがツールとなっていることを感じた。

(4) SSPの連携先

- ハーグ市
- リハビリテーションセンター
- 障害者連盟（運動組織）
- スポーツの知識センター
- 職業学校・運動教育組織

・全体に関わっている組織が多いから幅広く手が届く仕組みとなっている。

(5) バーチャル窓口の設置

いつでもスポーツクラブが検索可能な検索サイトをバーチャル窓口と呼んでいる。

4 スポーツ関連施設

(1) スポーツキャンパス (Sportcampus Zuiderpark)

ハーグ市のトップスポーツ施設（アリーナ、体操競技施設、ビーチバレーコート）、スポーツ職業学校、スポーツ相談窓口の複合型施設



施設外観

◆高等職業センター（ハーグ市）

- ・過去には体育教員の育成だけだったが、現在では運動の専門家の育成も行っている。
- ・リハビリテーションセンター、ハーグ市の学校や病院、ブラジルとの国際連携など幅広い職場に適用できるように ①参加率（スポーツ相談窓口の運営、スポーツを一緒にする友人（スポーツフレンズ）の存在） ②障害に合わせた運動 ③良いリハビリの研究ラインを設置
- ・障害者の日常的な行動を研究するため、10週間のインターン（サッカーチーム、イベント、リハビリテーションセンターなど）に参加する。生徒自身がインターン先を決めて先生に提案する。インターン先で障害者のモチベーション等のインタビューを行う。

【視察】

スポーツ車いすに乗って、バドミントン、バレーボール、ボーリング、迷路、卓球、筋力トレーニングを行い、どのようにすれば楽しめるかを実践する授業が行われていた。(写真①)



写真①

(2) バサルトリハビリテーションセンター

【施設概要】

- ・140年前にソフィア女王が設立し、国内で最も歴史がある。

- ・ 南オランダで 10 施設を保有している。
- ・ 約 1,200 人が勤務。75%が専門家。
医者 540 人、ボランティア 130 人
- ・ 入院患者（年間）子供 2,500 人、15-25 歳 350 人、大人 6,000 人
- ・ 年間約 7,000 万ユーロの収益
- ・ 病院（6 か所）、老人ケア施設（6 か所）、学校組織等と協力関係がある。
- ・ 「治療としてのスポーツ」、「地域と連携したスポーツ」の普及に取り組む。

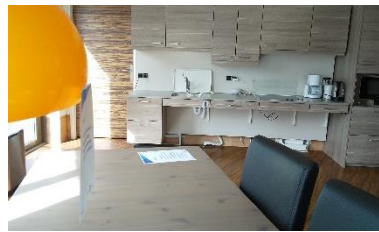


施設外観

【視察】

退院前の 2 週間は、病室ではなく、アパートを再現した部屋に住みながらリハビリを行う。音声指示で照明やテレビを付けたり、お風呂やトイレ、料理やゴミ出しなど日常生活を一通り行う。（写真②）

スポーツをしたい子供が多いので、スポーツの参加するハードルを下げるツールを大学と一緒に開発している。（Wi i スポーツ、床に映し出した映像の上で身体を動かすサッカーや迷路などのゲーム、VRでイルカと泳ぐなど）（写真③・④）



写真②



写真③



写真④



施設内部

5 スポーツクラブ

（1）フレンドシップセンター（アムステルダム）

【施設概要】

- ・ デニス氏が脳障害の息子と一緒に、安全で、同じ障害児といつもスポーツができる場所として「Only Friends」（スポーツクラブ）を創設し、クラブ施設としてフレンドシップセンターを個人で開設。
- ・ 25 種目を障害の区別なく受け入れる。
- ・ 年会費 120 ユーロ（2 種目）
- ・ ボランティアは 200 人（子供の送迎運転手に約 10 人）。週 7 日交代制でスポーツを指導。



施設外観

- ・曜日の感覚がない子どもにも、プール（青）、体育館（緑）、会議室（赤）の場所が理解できるよう建物は3色に分けている。
- ・追加投資した際に照明設備を改修し、プロサッカー選手も使えるように整備した。ヨーロッパのサッカーチームは社会的責任として障害部門を作っている。
- ・世界でも一番大きな施設で、これまで政府・自治体から支援を受けてこなかったが、来年から年間25万ユーロの支援を受ける。

★経営者（フィールドホッケーの元オリンピック）の話★

- ・「このスポーツクラブに来る子供は、かわいそうではない。」
- ・「障害は身体の制限ではない。」
- ・「スポーツクラブに来れば、誰も障害のことを見ない。」
- ・「来客は健常者という感覚でいる。」
- ・「『杖を使ってサッカーする子はサッカーをしていない』と言えるのか、足のない子が車いすを使っていたらキックボクシングをしていない』と言えるのか。このような問いがあれば、本人は、『私は、スポーツをしている』と言うはずである。」



☆考察☆

障害者のためのスポーツ施設では、障害者が安心してスポーツをすることができるので、障害者の自信や自己開発にもつながるのだと思う。このようなスポーツの付加価値は、スポーツを通して共生社会が作られている証拠であると考ええる。

広大な土地と充実したスポーツ施設は、スポーツクラブのスローガンである「自分のありのままで良い」が実現されている場所であった。東京都の障害者スポーツ施設のような役割を民間が果たしていることに驚きを感じた。

★ボランティア（創設者の息子を特別支援学校で教えた元教師）の話★

創設者からスポーツクラブを手伝ってほしいと直接誘いを受けて、定年退職後に週3回、テニスや野球を指導している。創設者は、情熱的な人で、話をしていると自然と一緒にやりたい気持ちになり、多くのボランティアが集まっている。ボランティア全員が、障害の知識があるわけではないが、経験してきたスポーツの指導にあたっている。



フィールドホッケーを希望してクラブに来た車いすの男性を担当した際には、様々なスポーツ種目を試したり、話を聞きながら自分に合うスポーツと一緒に探した。リオパラリンピック大会に出場する一番の希望を実現するために、ボッチャを勧め、結果的にリオパラリンピックでメダリストになった。

☆考察☆

リオパラリンピック出場という大きな夢を実現させ、スポーツクラブのコーチボランティアとしての役割を超えて、コミュニケーションを大事にしている事例であった。

ボランティアでありながら、スポーツ相談窓口のような役割を果たしている。西東京

市ではスポーツ相談窓口をまだ設置していないが、その同様の機能を果たす人や場所は、スポーツ相談窓口だけではなく、障害者の身近なところに必要であると思った。

(2) スポーツクラブ (Sportclub KAMELEON) (リハビリテーションセンターの隣、団地の中)

【施設概要】

- ・ 障害者がスポーツできる場所として 44 年間活動
- ・ 17 種目 (バド、バレー、卓球、シットイングバレーボール、車いすバスケット、歩くバスケットボール、ボッチャ、水泳など) を 4 か所で提供
- ・ 会員 420 人 ボランティア 80 人 従業員 6 人 (うち 4 人は時給制)
- ・ 月会費 15 ユーロ (2 種目) (ハーグ市の最低収入未満の人は市が割引カード「コウノトリパス」(市発行) が提供される。無料にする必要はないが、負担できない人には支援する必要があるという考え)
- ・ 対象年齢 5~59 歳 (18 歳未満の子どもは無料)



施設外観

- ・ 身体障害者、がんの手術をした人、退院間近の人が利用している。ハーグ市のスポーツ相談窓口からの紹介で身体障害者以外の人も利用する。
- ・ スポーツクラブでは、身体的にどういうライフスタイルが必要か、何が可能か確認している。
- ・ 退院する前にクラブに来て、会員として残るのは年間 8 人程度であるが、日常生活に戻れることはそれは良いことである。
- ・ 2 か月に一度、近隣住民と交流機会を設け、障害者の会員とふれあってもらう。
- ・ クラブハウスは、ハーグ市に土地代を支払う (ほとんどのスポーツクラブは市の土地を借りて、スポーツクラブが建物を建てている)。クラブハウスを保育やデイケアの人にも利用してもらい、料金収入がある。



(3) ハンドボールクラブ (Handball club Quintus)

【施設概要】

- ・ 会員は 16 歳~50・60・70 代までが在籍
- ・ 障害者は、知的障害・筋肉障害・腰痛の人が参加している。
- ・ 障害者のシーズン会費 125 ユーロ (子供と同じ低所得のこともあるから)
- ・ 当初は健常者のハンドボールクラブであったが、5 年前の相談をきっかけに車いすハンドボールの開発を始めた。3 年前のヨーロッパ選手権 (4 か国出場) で優勝。

★経営者の話★

- ・「車いすハンドボールの開発の話が来たときは、興味をかきたてられた。」
- ・「エレベーターなどの必要になった施設改造には、自治体政府からの支援金もあったが、実現できたら誇り高いことなので、クラブでも負担した。」
- ・「人によって障害が違うが、皆が一緒にできる共生の事例」

☆考察☆

健常者のエリートスポーツクラブにおいて障害者のスポーツを開発してきたことは、始める前から悩むのではなく、まずは誰でも受入れ、それから一緒に考えるというオランダの特徴が表れていた。

また、車いすハンドボールを開発したことによって、遠い場所からもこのスポーツクラブに参加したくて小さな町に来る人が増えことから、障害者スポーツの開発が町の活性化にもつながっていた。

★障害者の会員の話★

体操の練習中のけがで障害を負った方は、「健常者から障害者の世界に入るのを認めたくなかった。フェイスブックで見た体験会に参加してみたら、健常者も障害者も一つのチームとして、困っていたら手伝え合えそうなチームだった。」とスポーツクラブの特徴を話した。このスポーツクラブでも障害者が安心してスポーツができるということがキーワードになっていた。

また、10代で脳性麻痺になった方は、「障害者になってもハンドボールを続けられるのはうれしい」と話した。

☆考察☆

私も車いすハンドボールを体験した。ウォーミングアップで コツを教えてくれたり、ゲームでチームの攻守が成功して喜び合ったり、言葉が通じなくても分かり合えた。

車いすハンドボールが障害のあるなしに関わらず交流できるツールになっていることを実感した。このようなツールが西東京市においても提供できるようにしたい。



(4) 柔道道場 (Budo Sport Club)

【施設概要】

- ・ 障害児が約 60 人在籍（他のスポーツクラブで断られた子供もいる）

★クラブのコーチの話より★

身体障害児、知的障害児、行動障害児と一緒に指導している。柔道の身体をふれあう活

動が良い。

★当日の練習の様子★

- ・参加していた半数以上が障害児であったが、誰とでも自然とペアを作って練習していた。
- ・畳の上で鬼ごっこ、かけっこ、四つん這いの対戦など身体を動かす活動が多く、組手や受け身などの柔道の技術向上の練習は少なかった。
- ・1人の行動障害児は、競争などで気に入らないことが起きると父親の元へ駆け寄り、そのまま道場の外へ行った。少しすると父親と一緒に自然と練習の輪の中に戻り、指導者2人はその子供に対して特別に声をかけることもなかった。



☆考察☆

- ・日本の子供のスポーツ教室は、競技力の向上を中心としているので、想像できない光景であったが、スポーツがツールとなって他者との交流を生んでいる事例であった。
- ・コーチは、私たちに行動障害児のことを「あの子は行動障害があるから、あのようになめく」と親の前で説明したが、父親は気分を悪くすることなく平然していた。少し違うことも個性として受入れ、差別として見ていない考え方を持っていると思った。

(5) コーフボールクラブ (AKS Blauwwit)

【施設概要】

- ・年会費 25 ユーロ
- ・政府・自治体からの支援は受けていない



- ・障害者の会員は、周辺の特別支援学校や、障害者用のイベントで紹介し集まった。
- ・視察の日は、健常者のチームと障害者のチームは別のコートで練習していた。



★クラブのコーチの話より★

- ・ジーンズで来ても、ケガをしていても、ゲームに関わることが大事なので、やりたい人を受け入れている。

☆考察☆

- ・日本ではルールを教えて始めたり、指導者が入っていくが、オランダはやりながら覚え、プレーヤー自身が発見して身に付けている。「スポーツをすることが楽しい」と感じられることを大切にしており、それがスポーツやクラブへの継続的な参加につながっているのだと思った。

オランダ視察報告

今回の視察では、オランダのスポーツ関係者の話を伺ったり、スポーツ関連施設を見学させていただき、障害者が安心してスポーツができる場所とそれをサポートする活動が、オランダにおける「誰もがスポーツができる環境」を実現させていることがわかりました。

知的障害者のスポーツクラブ、身体障害者のスポーツクラブ、障害者を対象にした全国的なイベント等を視察し、どのスポーツ活動においても、障害者自身の意思で好きなスポーツに組み、生き生きとしている姿が印象的でした。

スポーツサービスポイントにおけるサービス提供者、その先で受け入れるスポーツクラブの経営者やボランティアなど、どの立場の方々も「誰もが共にスポーツできる」ことと、「人の役に立てる」ことに喜びを感じていました。

現在の「誰もがスポーツに参加できる環境」が整うまでには、政府や自治体の方針や支援がありますが、制度的な背景だけでなく、健常者と障害者が一緒に試行錯誤して作り上げた環境であることがわかりました。

また、パラアスリートは、競技と並行して社会貢献へ向けた専門知識の勉強もしている方が多く、引退後は、成長、育ててくれたスポーツに感謝する気持ちが強いとのことであり、第二の人生の一つに社会貢献がありました。日本で行われている、障害者に対する介護、介助という要素は薄く、共に生きる仲間、一員として人の役に立ちたいという気持ちが強いことを感じました。

オランダオリンピック委員会・スポーツ連合は、「スポーツは、人生を最適化に生きられる共生社会を実現するための素晴らしいツール」だと話します。オランダは、障害のある人もない人も、オランダ国籍の人もそうでない人も、様々な人々が暮らし、西東京市よりも多様な文化の中で共生社会を実現しています。

西東京市においても障害のあるなしに関わらず誰もが希望するスポーツをすることができ、誰もがスポーツを通して交流ができる環境を整えるために、既存の施設、場所を活用し、受け入れる側での環境整備や、環境が整ってから一緒に活動するのではなく、「まずは一緒に考える」ことを支える人々や、参加を促すことができる人々と取り組みたいと思います。

そしてスポーツの有用性を広め、誰もがスポーツを通して社会に参加したり、様々な人と交流ができる地域は、健康応援都市の実現にもかなうものだと思います。

オランダが一つの種目や、一つのスポーツクラブで始めたように、西東京市も一つのモデルとなる事例を立ち上げるところから取り組みを進めることが共生社会への近道ではないかと思います。